

獲物に群らがるハゲワシ

アニマルフォトグラファー
トラベルライター

平 岩 雅 代

アフリカのサバンナには、大型肉食獣が狩りをしたあとの残り物に群らがる小型肉食獣や猛禽類も少なくありません。

ライオン、ヒョウ、ハイエナ、チーターなどが食べ残した獲物の周辺をとり囲むように、順序を辛抱強く待っている姿は、感心してしまうほど……。

サバンナで最も良く見かけるハゲワシは、おもに 5~6 種類で、体全体が茶色く、背中が白い“ベンガルハゲワシ”，体全体が灰色で羽根の先端が白い“マダラハゲワシ”，そして顔が桃色とブルーの“ミミヒダハゲワシ”の 3 種類が、圧倒的に多いようです。変わったところでは、まるで顔にお白粉を厚く塗ったような“カオジロハゲワシ”という種もあります。

満腹の時のハゲワシは木の枝にじっとまっているか、草原で翼を広げ、日光浴を楽しんでいます(写真 1)。大きな翼を広げている姿は、まるで物干し竿にぶら下がった洗濯物のように見えます。空腹を感じたハゲワシは、大空をぐるりと旋回して地上の“ごちそう”を探します。そして発見するや否や



写真 1 翼を広げて気持ち良さそうなベンガルハゲワシ

った後なら、我先にとばかりに仲間を押しつけ、鋭いくちばしでつつき合ったり、爪で相手を蹴散らしたり、大騒ぎです。

「ギャー、ギャーッ」といかにも気味の悪い声で鳴き、争う様子は、騒々しさを通り越しています(写真 2)。

気の弱いハゲワシや、まだ若く群れの中で地位の低いハゲワシはこの争いに加わることをすらできずに、先輩が食べ終わって自分の番がやって来るまで、ひたすら待っているほかはありません。

ハゲワシは残り物のほかにへび、トカゲ、卵などを自力で捕食することはありますが、ほとんどは他人任せ。ところがこの食生活



写真2 獲物に群らがり、一心にごちそうを食べる

が時には思わぬ悲劇を招き寄せることもあります。

今から数年前、ケニアのマサイマラ国立保護区を車で走っていた時のこと。一頭のヌー(ウシカモシカ)の死体からさほど遠くないところにハゲワシがバタバタ倒れているのを見つけました。

近づいてみましたら、理由がわかりました。狩りによってではなく、自然死(病死)したヌーを発見したハゲワシが、そうとは知らずに食べた結果、集団食中毒を起こしてしまったのです。運良く“ごちそう”にありついて喜ぶはずだったのが、とんだ災難になってしまったわけですが、やはり「働かざるもの食うべからず」なのでしょう。

ところで広大なアフリカの国々の中には、“空を飛ぶお医者さん”(Flying Doctor)という医療体制があります。

通信システムや道路整備の立ち遅れが目立つケニアやタンザニアでは、国内であっても電話の普及が充分でないことから、無線ひとつでどこへでも飛んで来て診療してくれるので、助かります。その場でできない難しい治療は、患者を設備の整った病院へ運んでくれます。ただし当然のことながら、これは人間専用のサービス。いくら具合が悪くなくても、野生動物や鳥たちはこのサービスを受けるわけにはいきません。

いずれにしても集団食中毒になってしまったハゲワシたちには、気の毒としか言うことができません。

アフリカに住むハゲワシの平均的な大きさは、およそ 80 センチメートル。その中でミミヒダハゲワシだけは体長が 1 メートルを超える大型です。一方、エジプトハゲワシという黄色い顔の種は最も小さく、体長およそ 66 センチメートル。数種類のハゲワシが混ざって一緒にいることも少なくありませんが、このいちばん小さいエジプトハゲワシだけが、異色の存在のように小首をかしげて愛敬をふりまいているようです。

〈ハゲワシひとくちメモ〉

▶東アフリカ各国(ケニア、タンザニア、ウガンダなど)で話されている公用語のスワヒリ語で、鳥や飛行機など、空を飛ぶものはすべて“ンデゲ”と呼ばれ

ている。

▶ハゲワシは頭部にほとんど羽毛がないが、これは屍肉に頭を突っ込み、より多くの肉を食べる際に血で汚れないための工夫。